

悩む力

樋 口 進

奨励者紹介〔ひぐち・すすむ〕

学校法人夙川学院院長

神戸教育短期大学教授

わたしはいつも主に目を注いでいます。
わたしの足を網から引き出してくださる方に。
御顔を向けて、わたしを憐れんでください。
わたしは貧しく、孤独です。
悩む心を解き放ち
痛みからわたしを引き出してください。
御覧ください、わたしの貧しさと労苦を。
どうかわたしの罪を取り除いてください。
御覧ください、敵は増えて行くばかりです。
わたしを憎み、不法を仕掛けます。
御もとに身を寄せます。
わたしの魂を守り、わたしを助け出し
恥を受けることのないようにしてください。
あなたに望みをおき、無垢でまっすぐなら
そのことがわたしを守ってくれるでしょう。

神よ、イスラエルを
すべての苦難から贖ってください。

(詩編 25編15—22節)

姜尚中(カンサンジュン)『悩む力』

姜尚中という人の本に『悩む力』というのがあります。集英社新書の一冊です。これは、百万部以上売れたベストセラーです。この本の帯には、「不安の時代を生き抜く逆転の発想」という言葉が書かれています。姜尚中氏は、早稲田大学を卒業され、東京大学大学院教授をされていましたが、今は東京大学の名誉教授です。専門は、政治学です。テレビでもコメンテーターとして「サンデーモーニング」などによく出ておられます。マックス・ウェーバーの研究者で、『マックス・ウェーバーと近代』という著書があります。また、彼は、在日韓国人で、『在日 ふたつの「祖国」への思い』という本や自分のお母さんのことを書いた『母—オモニー—』という本もあります。また最近、東日本大震災を題材とした『心』という小説も書かれました。

さて、本のタイトルの「悩む力」というのは、彼の体験から出た言葉です。私たちは、常日頃よく悩むのではないのでしょうか。悩みの全然ない人などいないと思います。苦しい時、悲しい時、判断に迷った時、どうしていいかわからない時、私たちは悩むのではないのでしょうか。そして、悩みなどはできることならない方がいい、あってもできるだけ少ない方がいい、そしてなるべく早く過ぎ去ってほしい、と思っているのではないのでしょうか。すなわち、悩みはマイナスのことだと捉えているのではないのでしょうか。もし、悩みが自分にとってプラスのものだ、と捉えることができるなら、まさに「逆転の発想」だと思います。

姜尚中氏は、この「逆転の発想」を自分の母から学んだようです。彼の母は、在日韓国人として、波乱に満ちた悩みの海のような80年の生涯を送られたそうです。しかし彼は、その母の生涯を振り返って、「悩みの海を抱えていたからこそ、生きる意味への意志がより萎えることがなかったのだと思います」（『悩む力』 集英社新書 2008年）と述べています。ちなみに、姜尚中氏は、自分の母親を非常に尊敬しています。母親は十分な教育も受けておらず、字もよく書けないような人でしたが、人間としての生き方には多くの学ぶことがあった、というのです。そこで、昨年『母の教え 10年後の『悩む力』』（集英社新書）という本を出されました。

苦悩する人間

人間を定義する言葉に、homo sapiens というのがあります。これはラテン語ですが、homo というのは「人間」という意味で、sapiens というのは「賢い」という意味です。ですから、homo sapiens というのは、「人間は賢い動物」という定義です。他の動物と比較するならば、人間が一番賢いと思われるので、この定義は適切だと思いますし、事実生物学上での名称になっています。

もう一つの定義に homo faber というのもあります。faber というのは、「道具」という意味です。ですから、homo faber というのは、道具を作り、道具を使うのが、他の動物にない人間の特徴だ、ということです。これも確かに当たっていると思います。また、もう一つは、ナチスによって強制収容所に入れられ、『夜と霧』という本で自分の体験を書いたオーストリアの精神医学者フランクルの定義ですが、これは homo patiens ということです。patiens というのは、「苦悩」という意味です。ですから、homo patiens というのは、苦悩するのは、人間の特徴だ、ということです。犬や猫になったことがないので分かりませんが、恐らく犬や猫が過去に行ったことを悔やんだり、未来のことについていろいろ思い悩んだりしているようには思われません。したがって、悩むというのは、人間の特徴かもしれません。しかも、フランクルは、「苦悩する人間 (homo patiens) は、道具を使う人間 (homo faber) よりも高い所にいる」と述べています。

マックス・ウェーバーと

夏目漱石

さて、姜尚中氏は、この『悩む力』という本において、誰にでも備わっている「悩む力」にこそ、生きる意味への意志が宿っていることを、文豪・夏目漱石と社会学者・マックス・ウェーバーを手がかりに主張されています。漱石とマックス・ウェーバーは、今から100年ほど前にほぼ同時期に活躍した人物です。姜尚中氏は、二人とも、「個人」の時代の始まりの時、時代に乗りながらも、同時に流されず、それぞれの「悩む力」を振り絞って近代という時代が差し出した問題に向き合い、彼らの生涯には「苦悩する人間」のしるしが刻み込まれている、と言います。

夏目漱石は、イギリスに留学しますが、漱石にとって留学生活は決して楽しいものではなく、「先進国」イギリスの中に、日本が将来目標とすべき「希望」のようなものは全く見いだすことができませんでした。それどころか、イギリス人ほどいやな国民はいないとすら思っていたほどです。憂鬱な日々を過ごしたとも言われています。しかし、そのような悩ましい生活があったから、いろいろなシリアスな作品が生み出されていったのです。代表作である『こころ』における先生の、ついには自殺に至る深い悩みは、漱石自身が深い悩みを経験しなかったら、書けなかったでしょう。

一方、マックス・ウェーバーは、20世紀を代表するドイツの社会学者です。私は、2008年度に関西学院大学から機会を与えられ、ドイツのハイデルベルク大学で研究をしました。このマックス・ウェーバーは、100年ほど前、ハイデルベルク大学の教授でした。ハイデルベルクにネッカーという大きな川がありますが、その川沿いに白い大きな家があり、そこがマックス・ウェーバーズ・ハウスと言われる建物です。そこは、かつてマックス・ウェーバーが住んでいた家です。今は、語学の学校になっています。その家の川を挟んで対岸にハイデルベルク大学があります。マックス・ウェーバーは、その家から橋を渡って、大学に教えに行っていました。精神的な病を得て（たぶん鬱病だと思われます）、大学に行くことができず、自分の家で研究会をもったりしました。私も過ごしたことがありますから分かりますが、ドイツの秋から冬にかけては、とても暗くて寒くて、気分が落ち込みます。マックス・ウェーバーは、なかなか病気が回復しないので、大学をやめて、イタリアに転地療養しました。そうすると、しばらくして病気が治った、ということです。彼は実に多岐にわたる研究をし、数多くの著作を公にし、今もその影響を与え続けています。有名な著作の一つに『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』というのがあります。私も、学生時代にこの本を読んで卒業論文を書きました。しかし、そのような多くの労作が生み出された背後には、大きな悩みを抱えていた、ということです。

漱石にしてもマックス・ウェーバーにしても、素晴らしい作品をたくさん生み出したその背後に大きな悩みを抱えており、そしてその悩みが力になって、作品を生み出した、ということが言えます。

詩編作者の悩む力

さて、先ほどは詩編25編を読んでいただきました。この詩編は、詩人の深い悩みの中から生み出されています。どういう悩みかは、はっきりとは分かりませんが、16節を見ますと、「わたしは貧しく、孤独です」とありますから、経済的な悩み、人間関係の悩みなどが考えられます。また、19節を見ますと、「御覧ください、敵は増えて行くばかりです。わたしを憎み、不法を仕掛けます」とあります。「不法」と訳されている語（ハマースというヘブライ語）は、むしろ「暴力」と訳す方がいいかもしれません。すなわち、この詩人は、人に憎まれ、暴力まで受けている、ということです。このような深い悩みから生み出された詩です。そして、この詩人は、17節で、「悩む心を解き放ち、痛みからわたしを引き出してください」と神に祈っています。詩編の中の詩は、このような詩人の深い悩みの中から生み出されたものが多くあります。そして、このような悩みの中から、素晴らしいものが生み出されているのです。ですから、悩みというのは、決してマイナスなものではなく、そこから何か新しいものを生み出す力があるのです。まさに、姜尚中氏が言うように悩むことは、力になるのです。

〔参考文献〕

ヴィクトール・E・フランクル 『神経症Ⅰ』 宮本忠雄・小田晋訳 みすず書房 1961年

2019年11月6日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録